2025 年度　幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日	
法人名	園　名
織田学園	おだ認定こども園

まとめ　　全体平均　3.99

第2章第2節 乳児期の園児の保育	安定した愛着関係の中で自己発揮の健やかな成長がみられた。すなわち、見知らぬ環境にいても、安心できる場所に立ち戻って探索活動を続けることができ、そのことによって体を動かす・感性を働かせる、新たな出会いが生まれるという３つの柱の好循環が育ちの中に好ましくみられていたことが評価できる。３つの柱は、当園の理念と重なっていて、理念に立ち戻りながら保育内容を検証することが質の向上につながっていった。
第2章第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育	興味関心を広げたり、言葉を使う喜びを感じたりすることに保育者も含めて「環境」の設定が大切であり、適切な環境を提供するためにはより深い子ども理解と情報の共有が大切であった。環境スケールを取り入れて、折々内容を確認したり、他者視点からの助言を受けることもできた。一人ひとりの発達段階や個性も加味しつつ、個人計画・記録を取ることが丁寧な保育につながった
第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育	生活習慣の定着とスモールステップの支援により、健康への自信と挑戦意欲が育まれた。人間関係では、サークルタイムでの対話を通じ、友だちと目的を共有する喜びや傾聴の姿勢が育まれた。環境面では、探究活動で、環境をアレンジする様々な道具や備品を用意できたことで、探究心の深まりが見られた。また、自主性を尊重した活動の中で、自分の考えを言葉にする楽しさや、多様な素材を用いた豊かな自己表現が見られた。環境の領域に関しては遊びや生活で子どもの主体性を育むための工夫を考えたい。
第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項	個人個人を大切にすることと、職員間、職員と保護者間で子どもにまつわる情報を丁寧に共有していくことが健やかな育ちにつながる配慮点であり、十分に行こなえた。専門職は、それぞれの専門性を活かして、保育教諭と連携し、保育内容の質の向上に努めている。それぞれの立場からの配慮が丁寧にいきわたったと評価する
第3章 健康及び安全	この領域は、乳幼児にとって命を守る部分であり、主として担当する職員の責務も重い。その中で多岐にわたる業務をこなし、保育者との連携もなめらかに行う事で子どもたちの利益につながっている。専門職と保育者との連携は、こども園にとって重要な位置づけとなっているが、その多様性が理念の「人とつながるたくましさ」にもつながると評価できる
第4章 子育ての支援	地域に根差す園をめざして、そのニーズを探りながら様々な関わりをおこなってきた。地域からの利用が増えていることで、その成果をはかることが出来ている。誰でも通園制度など新しい施策も取り入れて、より広く地域に開かれた園を目指したい。園内の保護者には、日々の保育のドキュメンテーションなどを通して様子を知らせたり、連絡帳や対面のやりとりで子育ての支援を行えたと評価している
第5章 職員の資質向上	職員が自己発揮できる環境を基盤に、組織的な資質向上を推進している。研修計画の事前明示やオンライン受講の活用により、子育て中を含む全職員が計画的に学べる体制を構築した。学会発表等の外部発信は、学びの自分事化と自信醸成に繋がっている。 課題は、研修や自己評価とキャリアパスの連動が不十分な点である。次年度は職位別の役割を体系化し、成長の道筋を可視化することで、更なる意欲向上と組織力強化を目指す
総合	安定した愛着関係を基盤に、探索活動と心身の発達が連動する好循環が生まれた。すくわくプログラムをきっかけに探究活動に意識を向けて、環境をアレンジしたり、新しい道具や備品の購入により、子どもの知的好奇心と主体性を引き出した。特にサークルタイムでの対話や多様な素材による表現活動は、思考を言語化する楽しさや協働性を育む豊かな保育実践となった。今年度の取り組みから、色々な課題も見えてきているので、更に子どもの主体性を大事にした保育の実践を深めていきたい。また今年は専門職との連携で安全と質の向上を両立し、地域支援や発信も成果を挙げた。今後はキャリアパスを体系化し、組織全体でさらなる保育内容の深化を目指す。

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	15	3.33
「3歳未満児保育」	32	3.78
「3歳以上児保育」	53	3.83
「教育保育の配慮事項」	16	3.94
「健康・安全」	29	4.86
「子育ての支援」	18	3.83
「職員の資質向上」	9	4.33
計	172	3.99

データグラフ

